

代表作⑨ 時代小説

日本文藝家協会編



日本文藝家協会編

代表作時代小説

第九卷

編纂委員

武蔵野次郎

尾崎秀樹

村上元三

富田常雄

山岡莊八

東京文藝社

代表作時代小説 普及版 九五〇円

第九卷

昭和五十三年十一月十五日発行

編纂者 日本文藝家協会

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区大久保二六三

出張所 東京都新宿区松方町一番地

振替・東京六二二七五七

電話・(三六〇)二五五〇

0093-789809-5170

無検印承認

まえがき

吉川英治、野村胡堂、長谷川伸と続けさまに大衆文壇の大きな存在が、次々に失われた。執筆を絶つていた野村胡堂氏のはかは文字通り時代小説畑という域を越えて、現役の、そして再びあとに続く作家はいまのところ見当るまい、と思われる人だけに、その損失は大きい。

この一年間を振り返つてみると、時代小説の本道をめざす作家たちの仕事は少しもおとろえていない。その証拠が、ここに納めた代表作選集だ、という意気込みで今年もこの一冊を編んだ。

なるべく新人の作品を多く、というねらいだったが、枚数などの関係で残念ながら思うようにはならなかった。しかし、収録した作品の作家は文芸家協会の会員、非会員などということには一切こだわらず、公正な態度で臨んだ。

これで、この選集の九冊目を迎えたが、その間、時代小説もずいぶん新しい進歩をとげて来たと思う。この選集を続けて二十冊目を数えるまでには、どんな変化が現われるだろうか。

昭和三十八年七月

村上元三

目次

湯 の け む り	腹 二 条 ノ 后	割 つ て、 城 を	仇、 討 た れ ず 記	生 月 鯨 太 左 衛 門	さ ん ず ん	鳥 居 耀 藏	あ じ さ い 年 代 記	雲 と 残 月	水 の 天 女	金 太 郎 藩 麦
富 田 常 雄	戸 川 幸 夫	杉 本 苑 子	司 馬 遼 太 郎	柴 田 鍊 三 郎	小 島 政 二 郎	海 音 寺 潮 五 郎	小 田 武 雄	尾 崎 士 郎	伊 藤 桂 一	池 波 正 太 郎
二五	三	一九	一五	一三	一三	五	充	翌	三	七

十	ば	八	比	女	生	叛	涙	み
八	か	弥		人	首			の
条	む	の	翼	と	藩	逆		む
乙	こ	忠		人	記	兄	壺	し
	の	義	塚	形				
	記							
山	山	山	村	南	夏	中	永	永
本	手	岡	上	條	堀	山	岡	井
周	樹	莊	元	範	正	義	慶	路
五	一	八	三	夫	元	秀	之	子
郎	郎						助	
四	四	三	三	三	元	元	二	三
五	九	七	七	七	元	元		元

まえがき 村上 元三
 あとがき 尾崎 秀樹

金^{きん}
太^た
郎^{ろう}
蕎^そ
麦^ば

池
波
正
太
郎

作者のことは

池波正太郎

この小説は、四年ほど前に読んだ「未刊隨筆百種」の中から、ノートに數行メモしておいた江戸のそば屋の女出前持の話が、もとなつています。

これを書いたころは、武士を主人公にしたものばかりを書いていたので、久しぶりに江戸の市井ものをやつてみたいと思い、書きはじめたらまる一日で終りました。永い間、頭の中にあたたまつていたものだけにすらすらと書けたわけですが、その後、三回ほど机上にとり出しては手を入れています。

出来上りのよいわるしはともあれ、自分でもたのしく書けた小説です。このジャンルのものを、これから私は、いろいろにこころみたいと考えております。

著者略歴

大正十二年一月二十五日 東京都生

東京都品川区荏原二ノ二三四

日本文芸家協会々員

著書（小説）恩田木工、眼、信濃大名記、竜

尾の剣、応仁の乱、錯乱（三十五年上

半期直木賞受賞）、夜の戦士

（上演戯曲）檻の中、渡辺華山、名寄

岩、黒雲峠、牧野富太郎、賊将、その

他

（現住所）下品川区荏原二ノ二三

一

その男の軀は、何本もの筋金をはめこんだようにかく、ひきしまつていた。

見たところは四十がらみだが、胸のあたりの肉づきもがつしりともありがあり、それだけに遊びかたもしつこくて、お竹もしまいには悲鳴をあげてしまつた。

「ごめんよ、ごめんよ、ねえちやん。そのかわり、今度は私がお前さんに御奉公だ」

男は、あぶらぎつたふとい鼻を小指でかいてから、もしやもしや眉毛をよせ、

「さ、うつ伏せにおなり」

やさしく言つた。

「どうなさるんです、旦那——」

「ま、いいから、うつ伏せにおなりというに——」

「あい……」

と答えはしたものの、この上にもてあそばれてはとてもたまらないと、お竹は思つた。

（でも、仕方がない。この旦那は、私に一両もはずんで下すつたんだもの）

観念をして、お竹はふとんの上につ伏せになつた。

顔のほうは、眼も斜視だし鼻すじもいびつだし、誰が見ても美人だとはいえないが、軀だけは、お竹自身が自

慢のものであつた。

越後うまれのお竹の肌はぬけるように白くて、男の肌をこちらの肌にとかしこんでしまふほど肌理がこまかい。

十九歳の若さが軀のどこにも充実していた。

「はめるわけじゃないが、お前さん、その肌だけは大切におしよ」

男は、お竹の背中から腰へ長じゆばんをかけてやりながら、そう言つた。

と思う間もなく、男の手が、お竹の腰を押えた。

「あ……ああ……」

思わず、お竹は嘆声をもらした。

「いい心もちだろう。さ、ゆつくりとお眠りよ。私はこう見えても、あんまがうまい。さんざたのしませてくれたお礼に、すつかりもみほごしてあげるからね」

男の指は、たくみに動きまわつた。

障子の外は明るかつた。

晩春の陽ざしが部屋の中の空気を、とろんとゆるませている。

ここは、下谷池の端仲町にある（すずき）という水茶屋だ。女主人のおろくというのは六十にもなるのに茶屋商売兼業で金貸しをやり、そのほかにも手をひろげ、金もうけになることなら何でもやろうという婆さんなのだ。

客をとる女に、そつと場所を提供するのも、何でもやろうのうちの一つに入っているわけであつた。

享和三年のそのころ、江戸市中には公娼のほかに、種雑多な私娼が諸方にむらがり、奉行所の手にあまるほどの盛況をしめしていた。女あそびをするのなら公認を得ている新吉原をはじめ、いくつかの廓へ行けばよいのだが、もつと安直に遊ぼうというためには私娼のいる岡場所へ出かけて行かねばならない。

そのほかに、お竹のような女が客をとる仕組もあつた。

つまり、客商売で肌を荒らしてはいない素人女が、生計のために、ときたま客をとる。客もまたこれをよろこぶのである。したがつて金もかかるが、客は、水仕事に荒れた手をしているくせに肌身は新鮮な女にひかれて後を絶たない。

私娼に対する奉行所の監視はきびしいものだし、捕まつたら最後ただではすまない。

しかし、誰にも知られず気のむいたときに出て行つて、客をとる自由さが、それを必要とする女たちには何よりのことで、病気の亭主を抱えた女房が、昼間にそつと春を売ることもあつた。

お竹は、浅草阿部川町の飯屋〔ふきぬけや〕の主人の世話で、客をとるようになった。

〔ふきぬけや〕と〔すずき〕の婆さんとは密接な連絡がたもたれていて、お竹は飯屋の主人の呼出しをうけ、気がむいたなら、そつと仲町の水茶屋へ出かけて客を待つという仕組なのである。

お竹が客をとるようになったのは去年の十二月からであつた。

ふだんは、手伝いのかたちで〔ふきぬけや〕の女中をしているのである。飯屋の女中でも生きて行けないことはないのだが、お竹には別のぞみがあつた。

人なみに嫁入りをするということなどは、すでにあきらめてしまつているお竹だ。

それには、あきらめざるをえないような事がらが彼女の身の上に起きたからである。

それにしても、こんな客は、はじめてであつた。

武州・川越の大きな商家の旦那で、ときどき江戸へ出てくるのだというが、昼遊びで二分というきまりを一兩も出し、遊んだあとで女をあんましようつという変つた旦那なのである。

「若いうちはいいなあ。どうだい、軀中のどこもかしこも、こりこりしているじやないか」

川越の旦那は、そんなことをつぶやきながら、あきることなくあんまをつづけるのだ。

「もう、けつこうです。それじゃ、あたしが困ります」

お竹がたまりかねて起き上ろうとすると、
「いいさ、いいさ。こんなに見事な軀をもませてもらう
のもこれが最後かも知れない」

「え……？」

「何、こつちのことだよ」

「もう来ては下さらないんですか？」

いい客だと思ふから、お竹も精いつばいの愛嬌を見せ
て訊くと、

「たぶんねえ」

川越の旦那は、ためいきをついて、

「どうも商売が急に忙がしくなりそうなので、しばらく
江戸へも来られないよ」

という。

もまれているうちに、お竹は眠くなつた。

肩から背すじへ、そして腰へと、旦那の指にもみほこ
されると、あんまなどに一度もかかつたことのないお竹
の若い軀もくたくたにころよくなり、ついつい眠りこ
んでしまつたのだ。

はつと眼がさめた。

川越の旦那はいなかつた。

夕暮れの気配が、灰色に沈んだ障子の色に、はつきり
と見てとれる。

「あら……」

あわてて軀を起しかけ、お竹は「あッ」といつた。
はちきれそうな乳房の谷間へ手ぬぐいに包んだ小判が
差しこまれていたのである。

二十両あつた。

川越の旦那がくれたものに違いないと、お竹は思った。
小判を包んだ手ぬぐいに見おぼえがあつたからである。

「まあ……」

そのとき、お竹は身ぶるいをした。

(これで、私も、商売が出来る……)

水茶屋を出るとき、〔すずき〕の婆さんはお竹の取り
分として一兩のうち二分しかよこさなかつたが、お竹に
とつて、そんなことは、もう問題ではなかつたといえよ
う。

二

お竹は、越後の津川にうまれた。

うまれたとき、すでに父親は死んでいたという不幸な
生いたちである。母親は津川の実家へ戻つて来てお竹を
うんだのだ。

津川は、新潟と会津若松の中間にあつて往来交易のさ
かんな宿駅だが、お竹の母親の実家は小さな商人であつ
た。

お竹が六歳の夏に母親が病死をすると、子だくさんの

伯父夫婦はお竹を邪魔にしはじめた。

江戸からやつて来る旅商人の口ぞえで、お竹が江戸へ連れて行かれ、本所元町の醬油酢問屋・金屋伊右衛門方へ下女奉公に出たのは彼女が九歳の春であつたという。

主人の伊右衛門は養子で、帳場でそろばんをはじくよりも書画や雜俳に凝るといつた人がらだものだから、商売は一手に女房のおこうが切りまわしていた。

よいあんばいに、お竹は、この男まさりのお上さんから可愛いがられ、

「行先のことを心配おしでない。私がいいようにしてあげるからね」

と、おこうはお竹を手もとにおいて使つてくれ、ひまがあれば手習や針仕事、そろばんのあつかい方までおぼえるように、念を入れてくれたものだ。

(こんなに、私はしあわせでいいのかしら……)

越後の伯父の家での陰々とした幼女のころの暮しを思うにつけ、お竹は今の自分が享受しているものを、むしろ、そろそろしく思つた。

十四か五の彼女が、行手の不幸をおぼろげながらも感じていたのは、やはり生れ落ちたときからの苦勞が身にしみついていたからであろう。

(このままでは何だかすまないような気がする。このまま、私が、しあわせになつて行けるほど世の中はうまく

出来ちやアいない……)

その通りになつた。

寛政十年の夏のさかりに、お上さんのおこうが急死をしてしまつたのである。

いまでいう脳溢血であつたようだ。

お竹は、このとき十四歳であつた。

以後、金屋の商売は、まつたくふるわなくなつた。

お上さんでもつていた店であるだけに、おとろえ方も早く、主人の伊右衛門は女房に死なれて、ただもう、おろおろと何事にも番頭まかせにしておいたものだから、店を閉めなくてはならぬようになるまで一年とはかからなかつた。

伊右衛門は、一人息子の伊太郎と下女のお竹と老僕の善助をつれ、深川亀嶋町の裏長屋へ引移ることになつた。

半年もして、本所の店が商売をはじめたと思つたら、何と大番頭の久五郎が主人におさまつてゐるのだ。

くやしがつたが、どうにもならない。久五郎は、法的にも遺漏のないように店を乗つ取つたのである。

とにかく、何とかしなくてはならない。

伊右衛門は五十にもならないくせに愚痴ばかりこぼして、朝からふとんをかぶり夜もかぶりつづけているといった工合だから、十五になる伊太郎にのぞみをか

け、老僕の善助とお竹が働くことになった。

二人は、子供のおもちやにする巻薬人形を売って歩きはじめた。雨がふらぬかぎりは諸方の盛り場や縁日をまわつて、はじめのうちは五十文そこそこの売りあげであつたが、そのうちに二人合せて日に四、五百文のもうけを得ることが出来たのである。

三年たつた。

お竹は十七歳、伊太郎は十八歳である。

伊太郎は、父親の伊右衛門が病死をした十六の春から堀留町の醤油酢問屋・横田屋五郎吉方で働いていた。

横田屋は同業の関係もあり、かねてから金屋の零落ぶりに同情をよせていたものである。

伊太郎は亡母ゆずりの才氣と愛嬌があつて、これを横田屋の主人に見込まれた。

「どうだね、伊太郎。お前もいずれは一本立ちになるつもりなのだろうが……いつそのこと、酒屋をやつてみないか。ちようどいい売り据えの店があるのだがね」

と、横田屋五郎吉が言つたのは享和二年二月のことであつた。

その酒屋の売り店は横田屋のすぐ近くで、売値は三十両だという。

「とんでもございません。私も十五のときから世の中へ放り出されまして、一時は子供のおもちやを売り流して

稼いだものです。そのとき、ためました金が、十両ほどございますが、それでは、とても、とても……」

と、伊太郎は首をふつてみせた。

横田屋は、伊太郎がもつてきて見せた十両余の金を見て、いよいよ感服したものだ。

「えらいものだ。お前は亡くなつたおつ母さんそつくりだよ。それにしても、子供のときから、しがない商いをして、よくこれだけのものをためたものじやないか」

「へえ……おそれいます」

うつむいて、伊太郎は、そつと指で目がしらを押えたものだ。

十九の若者にしては、まことに隙のないやつではある。伊太郎がもつていた金十両は、みんなお竹が稼いだものだ。

「一日も早く、小さなお店でもいいから持つようと、私は、そればかり祈つていゐるんです」

と、お竹は白粉も買わずに伊太郎へ差し出しつづけてきたのだ。

亡くなつたお上さんへの「忠義」ばかりではない。

すでに、お竹は伊太郎と只ならぬ関係にあつたのだ。

一年も前からである。

横田屋に対して、伊太郎は、お竹のことをおくびにも出さなかつた。

当然であろう。

少し前に、伊太郎は早くも横田屋の娘で十八になるおりよにも手をつけていたのだ。

すばしこいやつではある。

そのことを知らずに、横田屋五郎吉が、

「どうだい。その十両のほかの足りない分は、私が出そうじやないか。そのかわり、お前にもきいてもらいたいことがある。いいえね……実は、お前がよく働いてくれるし、行先ひとかどの商人にもなれよう見込みもついていたことだし、女房とも相談の上で、ひとつ、うちのおりよをお前にもらつてもらいたい、と、こう思うんだが、どうだろうね」

待つてましたと手をたたきたいのをじつと我慢して、

伊太郎はあくまでも殊勝気に、

「もつたいない」

と、いった。

これで万事きまつた。

お竹は、のけものにされた。

「女房にする」とは伊太郎も言わなかつたのだが、お竹は、そのつもりでいた。

老僕の善助でさえ、そう思っていたのだから二人がむつまじくありさまは、ごく自然の成行であつたといえよう。

もちろん、そのときは伊太郎もお竹を捨ててゐるつもりはなかつたかも知れない。

ところが横田屋のおりよというものを見てから、次第に伊太郎の野望が本物になつていつたのであろう。

おりよとの婚礼をすましてしまつてから、伊太郎が亀嶋町へやつて来て、

「私は、お前を女房にするといつたつもりはないよ」

と、お竹に釘をさした。

「小さな店だが働くつもりがあるんなら、お前も来てくれていいんだが……」

「けつこうです」

お竹は、表情も変えずに答えた。

そして（ああ……やつぱり、こんなことになつてしまつた……）と思つた。

少し前から、お竹は女らしい直感で、伊太郎の心が自分から離れて行くのを予知していたようなところもある。老僕の善助は、

「これから、お竹ちゃんはどうするのだ、どうするのだ」

と心配をしながらも、伊太郎の店へ行つてしまつた。

お竹は、唇をかみしめて耐えた。

阿部川町の居酒屋兼飯屋の（ふきぬけや）へ住込み女中に入つたのは、伊太郎と別れて三日後のことである。